

私の賞味期限

谷川 二郎（1組）



寝る前には今日一日も無事に終わったと安堵し、翌日の朝、目が覚めて「まだ生きていた」と喜ぶ。最近はこのように気持ちで毎日を送っている。

昔は五十歳を超えると年寄りと思われた。今年（平成二十六年）で私は七十四歳になる。七十歳を超えると年を取ったという気持ちになるようだ。

私が住む町では、老人会員になる資格（？）は、七十三才である。老人の数が増えてきて、老人会が財政的に持たなくなるためか（？）会員になる年齢資格は高騰（？）してきている。

しかし、今年はこちらの意思には関係なく、自動的に老人会の仲間入りである。ああ私も老人扱いになってしまふのかと淋しい気持ちになり、私の人生の賞味期限が迫って来る思いに駆られる。



最近読んでいる本といえば、五木寛之著『生きるヒント』シリーズ、藤本儀一著『人生の賞味期限』石原慎太郎、石原結實対談『生きる自信』江原啓介著『天国への手紙』大津秀一著『死ぬときに後悔すること』といったような、老後をどんなに有意義に過ごすかをそれぞれの人生経験に基づいて書かれた先達のメッセージである。このいった書物から「老いを生きる」ヒントをいろいろと教えられるが、よし！このように気持ちで生きてやるぞといった絶対的なものにはこれまで出会ったことは残念ながら無い。

それは自分自身で見つけ出さなければならぬのだと思う。だって、人はそれぞれ違うし、人生もそれぞれ、男も女もイロイロだからである。でも何か基本的に同じものがあるような気はする。

私の賞味期限はいつだろう？またどんな基準でもって賞味期限と考えたらいいのか？と自問自答する。仮に私の賞味期限をこの定義してみたい。生きていることをうれしと感じることが無くなる時、ときめきを感じなくなる時を賞味期限と考えよう。

身体的には、自分で自分の身の回りの世話が出来なくなる時、精神的には、自分で考え判断したり決定したり出来なくなる時。人生を味わいながら生きれる期限。

ただ賞味期限が切れたからといって命が終わること、つまり「死」を意味しない。それは賞味期限のお話ではなく消費期限の話になってしまう。実は怖いのは、賞味

期限が切れた後の状態である。

年を取ると子供に戻るとよく言われるが、若いころには覇気に満ち、人や社会にもそれなりに貢献をして来たと思われる存在が、人生の終点では、思考力や判断力を喪失した駄々っ子や拗ねっ子のような状態になってしまうのでは、何のための人生だったのかという疑問が起こり、時には怒りさえ覚える。

自分の人生に何か意味があるかと考えるのが間違いなのかも知れない。しかし私は何か意味があると思いたくなる。

賞味期限が切れた後では、人生を考える思考力や喜びの感覚などが失われてくるのではないかと恐れる。これでは終わりよければ凡て良しにはならない。この疑問に今はそして今後私は答えられそうもないし、また誰かが適格に答えるのに出会ったためしもない。残念ながらこの怖い疑問には答えられない。

しかし、大事なことは、消費期限が切れるまでいかに人生を如何に「おいしく」生きていくかであり、食料品や物品に表記されている賞味期限が何日かの猶予が盛り込まれているように、賞味期限を少しでも長く先に延ばして行く工夫をすることである。

ということ、ここでは消費期限の話まで話題を延ばすのでなく賞味期限の切れるまでの話にしておきたい。

還暦の六十歳になった時、第一の人生が終わったと思い、これからは第二の人生と考えることにした。

第二の人生では、第一の人生ではやらなかったことをしたいと思った。これまでの経験しなかつた何か新しいことを！しかし、新しく仕事を見つけたとか、何か起業するとか、大きな夢を抱くとかいったデカイことは、年齢的にも財政的にも無理な話である。年金生活でも出来ることではなければならない。それは生き方を変えることである。

私の人生は、今思うと後悔と痛恨の想いの連続であった。あの時にはこうすれば良かった、もっとこうしておけば良かったという下衆の後知恵である。私の人生を車の運転に例えるなら、一旦停止すべきところで、チョット立ち止まって考える余裕を持たず、スピード違反で猪突猛進して見たり、果ては一方通行のところを急がば回れと突っ込んで、反則切符を切られたり、時には出口のない路地に迷い込んだり等の失敗の連続である。（最近、有難いことに反則切符を切られることがとても少なくなりました）

出来ることならもう一度人生をやり直したい思いである。そうしたらもっとましな人生を送れるかと望む。それは出来ないことなので、出来ることは、自分に対する後悔の念の強さを和らげ、その時はそうせざるを得なかったのだと自分を許すこ



とにした。そうすると気分が少し楽になる。

次に今までになかった自分になろうと考えた。それは日常的な些細なことから自己改良を始めることである。最近のテレビでは、医療や健康に関する番組が増えてきて、自分の生活の中に取り入れてみたいと思うものが多々ある。

そこで「健康」を旗印に、体に良いことをやってみることにした。食生活の改善で、食物を噛む回数を増やすこと、起きてすぐに水やお湯を飲むこと、毎日の排便、適度な運動、十数年前から始めた気功と歩行、余りお金の掛らない健康サプリメントの摂取、十分な睡眠を取ること等をやっている。



睡眠と排便で悩んでいる人が多いと聞く。私は眠薬を飲まずに眠れるので有難いが、排便の方は苦労している。便意を催して便器に座るとデナイ、何度か頑張っても努力するもダメ。諦めて立ち上がってトイレを出ると今度は便意を催す。それを何度か繰り返す辛さ。クソ！自分の体なのになんでいうことを聞かないのだ！毎日排便する習慣を作るために苦労している。柑橘類を欠かさないとか、朝必ずトイレに行くとか工夫している。

年を取ってくるとうとうしても周りの人々よりも自分のことだけに気が向いてしまう意識狭窄が起る。

「生きていく」ためには、毎日色々な小さいことを持続的にやり続けていかねばならない。それが物理的に出来なくなると、あるいは精神的にやることを諦めてしまつと「死」が手ぐすねを引いて待っていると、自分に言い聞かせている。生きていくということは『何かをする』ことである。人は何かをして生きている。

『何かをする』ことがあることが私の賞味期限がまだ切れていないことだと思つた。

私は現在、仕事のようなボランティアのようなことをしている。低所得者やホームレスの人々の為に仕事と住居をお世話している、あるNPO法人に所属している。私の担当は、路上生活からアパートに移った後の一人暮らししている人々のお世話である。最近生活保護費の膨大化とその悪用が問題となっているが、生保の受給が「生きる」ための助けとなっている人々の数は多い。

非人間的な生活環境は、これらの人々の賞味期限を確実に縮めている。しかし受給者がこのまま増え続けるとこの国の財政は破綻してしまうという矛盾に出会う。私たちの存在や生活は多くの矛盾から成り立っている。そしてその矛盾を解決することは難しいことが多いし、生活保護費の問題もその一つと言えよう。

このNPO法人の下で、一人暮らしの世話をすることが、私の賞味期限を延ばすのに役立つている。一週間のうち十日と水曜日を除いて四日間、事務所に出ている。

私たちがお世話してアパートに入居した人々の数は、ここ数年で五百名位になる。私の仕事は、これらの人々を訪問し、安否を確認することです。

これらの人々の約九割は、かつては路上生活をしていたホームレスの人々である。ホームレスとは帰る家のない人というより、親子兄弟や親族、友人、知人など、すべての人々との人間関係を喪失した人のことと私は言いたい。

シエイクスピアが言うように、舞台の上の役者のように人はこの世で色々な役を演じて生きている。私たちには会社員とか弁護士などの社会的意味での職業、父親や母親、夫や妻などという家庭の中で位置付けの人間関係があるが、ホームレスの人々は、こういったすべての人間関係の「絆」から排除された存在になっている。

路上で人が亡くなると、人の目に留まりやすいが、アパート暮らしの人には、死後何日が経ってから発見される孤独死がある。誰にも看取られずに死んでいくのは悲しい。

一人暮らしをしている人々を訪問して気づいたことの一つは、何回か訪問して親しくなると、彼らが人と話をしたいという気持ちに分かる。

話の話題は特にあるわけではないが、人と話すことを喜んでいる様子が伺える。従って、私の訪問の目的は、彼らの話を聞いてあげることになる。孤独は自ら求めた結果ではなく、周囲の人々から張り巡らされた壁の外の孤独という側面もある。しかし、自分のことを自分でやれず、自ら自分の消費期限を早めている人々に對する社会の目は厳しい。ここにも矛盾が存在する。

人の話を聞くのが私の仕事と言ったが、人と話し合う機会を与えて貰っているのは、これらのひとり暮らしの人々ではなく、実は私の方かもしれない。そして一人暮らしの人々の生活を見て「自立」とは何か「生きる」とは何かを教えて貰っているのは、私の方かも知れない。

楽しさという点で、私の賞味期限を引き延ばしてくれるものとして、囲碁と百円温泉がある。

囲碁は大学生時代に覚えたが、筋が悪くて中々上達しない。日曜の昼にあるNHK杯争奪戦の対局の面白さがやっと最近わかるようになった。休みの日には囲碁ばかりうってという家内の小言に怯まず、不動産をやっている碁友と対局を楽しんでいる。

奥の深いゲームで、相手の性格や考え方まで伺えるところがあり面白い。私の碁の腕前は、自称苦心惨憺ならぬ苦心三段です。



家から車で三十分以内に二十軒以上の温泉がある。五分以内に一番近い弁天温泉があり、二十五メートルの温泉プールやトレーニング・ルーム、そして郷土品や野

菜の販売所がある。もう少し行くと梶尾、菊南、七城、泗水などの多種多湯の温泉がある。さらに足を延ばすと、菊池、平山、山鹿、玉名などの有名な温泉がある。私の行きつきは百円温泉です。当初はコンクリート会社の従業員用温泉として始まったものが、一般の人にも新しく新築されて開放されたものと思われる。

熊本の温泉の入浴料金は大体四百円だが、三百円、二百円そして百円もある。私の行きつきの百円温泉は（残念ながら混浴ではないが）大小の浴槽が二つと五つの洗い場を持つ小さな温泉である。公衆浴場にある番台なるものはなく、出入りの口に番をする人は誰おらず、円形の自動開閉機に百円を入れて入る。

私はこの温泉のお湯の温度が好きである。多分、私の感覚では三十八度前後のお湯で、真冬には中々温まらない嫌いがあるが、その他の季節では心地よい湯加減でゆったり出来る。

を返す礼は忘れない。

普通の温泉や大衆浴場では交わされないこの手の挨拶は、どんな意味があるのだろうかと考え。最初は見知り合い同士の挨拶かと思っただが、どうもそうではなく、浴場に入る時に浴場に入っている人たち全員に呼び掛けられた挨拶だと分かった。

番台があれば、百円という安い入浴料に対する感謝の気持ちを、そこに座っている人に掛けられよう。その感謝の気持ちを代わりに入浴中の皆さんに掛けたと推測される。

この挨拶の習慣は、新築される前の従業員用兼温泉の時からのもので、その時は浴槽一つだけで、そこに五人の人達が九十九折に向かい合って足をまげて入る大きさだった。まさに家庭の風呂を少し大きくした程度のものでした。この小ささが家庭的な雰囲気を作り、他の大きな温泉には見られない挨拶の習慣を作ったのかもしれないと思う。

「この温泉には、夫婦で来る人も多い。上がる際には、お互いに声を掛け合っている。「おーい、あがつぞ」と声に「はい」と答えが返ってくる。女湯の方から「お父さん」と声があり、夫ならぬ別の人が「わかった」と答えて笑いを買ったこともある。その人も夫婦で一緒にきたのであろう。

それにしても、長年連れ添いあってもまだ奥さんの声が「分らない愛」のか？ これも小さな温泉でなければ聞かれない夫婦のやりとりである。

五木寛之さんがこう書いています。「この憂愁に満ちた人生を励ましてくれるものは、日々のふろいびびび」「一回一回ふろいびび」と提言しています。そして、



と挨拶する人がよくある。私は気恥ずかしさもあって挨拶しないのだから「こんにちは」と挨拶されたら「こんにちは」と挨拶

五木さんの喜びの内容は、大きな喜びだけではなく、実は他愛のないもの、例えば新幹線の窓から富士山が真正面によく見えたとか、買ったボールペンが実に書き心地がよいとか、安くてうまい鱒寿司の弁当の最後の一個にありつけたとかいったものです。

「喜びたい心の触手を大きくひろげて待ち構えている」と、色んな喜びが自ずからやってくると五木さんは説いている。

私たちの消費期限を少しでも延ばすためには、喜びという人生の甘味料は命の存続に欠かせないものです。

八期会のみなさんの消費期限が伸びれば、八期会自身の賞味期限が伸びることになります。皆さん頑張りましょう！

